

114
A 2754

大正十一年四月
限侯爵寄贈



通日奉呈上候警視官吏不正、撥
 下、窺々たる書面之儀、身尚上陳仕度、昨
 之由、夫在揖請、遂々胸中、上陳スル、
 由、如何、遺憾相極、在何、
 快、侍、奉、窺、苦、候、均、其、内、
 冒、上、陳、セ、ル、者、
 則、前、書、細、陳、仕、
 起、
 大、病、身、以、
 百、有、

檻中ニ苦メラシ親戚、面會モ許サレヌ物
品差入モ禁セラシ恰モ重罪人ノ如キニ扱
受タシ帝野禮行昨十三日東京裁判所
糾問掛ニ於テ其方儀藤田組探偵ノ事
件存遂紀回処犯罪、証憑無之ヲ以テ釋放
スト、宣告ヲ蒙リ青天白日ノ身トナリ帰
宅シタシ趣ウ刑ヲ直ニ面會其大略ヲ乘
シ五月廿四日警視第ニ謀ニ出頭後処
蓋而差出置候吟味願之儀、其間
傍ノ被告タシ一等警視補永澤ニ常

主任ニ而取調相成ル、其禮行ニ於テ間接
被告、吟味受リ可キ、理由ナキト陳述シ
タシ所直ニ是ニ控、命シテ引立拘留セシヲ
タリ半信檻中ニ於テ病ヲ爲シタシ親戚
面會物品差入モ許サス蓋身縛リ苦シヲ
或ハ警部檻中、来リ忍講リ以テ威トシ
又々且数名列爲思毒スルカ如キ吟味リ
爲シタシ其吟味、條款悉ク真誠ノ事
タルモ法ニ問フヘキモノ、非ス況ヤ偽造ニ
出ルモノナリヤ加之警視第ニ謀ニ吟味リ

体裁ヲ失スルヲ以テ其吟味、受テヤル趣キリ
明答レ已ニ絶食一命監中ニ終ラントスレモ
殆トト世余リナルニ其聲前日ニ異ナラス
先月下旬乳白判事、吟味ヲ受テヨリ
始テ種生スル思ヒヲ為セリ就而者家初
石井中警視、向テ差出シタル吟味形事、
面接被告ノ永澤警視補、其吟味
係主任ノ命シ又且ツ同書ヲ同レテ面接被告
一等警視補森貞、下付シテ稿カニ直接
被告木村真ニ席、森貞ノ自宅ニ於テ

其答々書リ豫メ造為セシメタル儀共、石
井中警視、造意、出テ成立シタル奸策
ヲ以テ前件ノ如ク艱苦ヲ受シテ劃ヘ罪ニ
構陷セシメタル事跡明白ナレハ石井中警
視ヲ始メ其部下ニシテ其奸策、預リテ者ヲ
悉ク被告トシテ法衙、公訴シ無実、汚名ヲ
江湖萬世、雪カシ是禮行今日ヨリ一身ヲ
抛テ為ス、事案也。惟唯一少シテ驚愕ヲ
極メたり嗚呼全國治安ヲ保護スルニ
總轄々々石井中警視其任ニシテ如此

奸策ヲ施ス部下之内或ハ之ヲ助成シ
其禍悪ヲ遂シノレトスル者ニシテ輩アリ
ト至民然レド警視第ニ課機密係リ大
田孝敬ノ如キハ粗事理ニ達シ頗ル義氣
ヲ有スル者ナレハ諛事係ノ探偵ヲ命セラシム
ニ断然之ヲ長官ニ謝絶シタリト云リ其他
六千ノ局員豈悉ク面諛曲從スルノ輩ノ
而已ナラシヤ必此輩有ルヲ少テハ若署若
課紛議ヲ生シ為ノニ一局瓦解ノ基ヒト
ナルハ疑ヒナカル可シ故ニ過ノ其上言レ

ナル主義ノ如ク其官ヲ以テ被告トスルト
其人ヲ以テ被告トスルハ人心政府ヲ信憑
スルノ厚薄且治安ヲ妨害スルノ淺深ニ大
關係アリト事ナレハ所恆然スルハ忍ヒス敢テ
再ヒ止陳ス以為速カニ諛奸策遠意者
以下ヲ奪官シ政府ノ公明正大偏頗愛
憎ナキヲ公布シ玉ハレ事ヲ否サレハ所恆以者
諛奸ノ政府ノ御趣意ニ出タリト信セサルヲ
得ス又々後世專論ノ歸着スル所名忍
上

聖徳ノ御煩ヒトナルニ至ラハ此祚恒憂慮
措リ能ハサル者也誠恐煩首

鹿見島縣士族

明治三年九月十四日

吉國祐恒

参議大隈重信殿

追白 桑野吟味願書見仰参考
為ノ奉テ尊賢之候



上申書

終

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

石垣謹而按

中警視石井邦敵ハ國家ノ大法ヲ
亂傷シ人道ノ大倫ヲ毀損シ上ハ
天皇陛下ノ聖勅ニ背キ下人民ヲ殘害
スルノ罪人也然ルニ今之ヲシテ全國ノ警
察ヲ總轄セシム一日之ヲ置ケハ則一日
聖旨ニ悖リ國民ヲ荼毒ス而シテ之ヲシテ
全國ノ安寧ヲ維持シ風俗ヲ厚正ナラ
シムト欲スモ豈得可シヤ決テ得可カラカ
ルナリ

明治三年庚午十二月

聖勅ニ曰ク朕刑部ニ勅シテ律書ヲ改
撰セシム乃チ綱領六卷ヲ奏進ス朕在
廷諸臣ト議シ以テ頒布ラハルニ内外有
司其之ヲ遵守セヨト其綱領訴訟律
聽訟回避條ニ曰ク凡ソ官吏訴訟人ト
親族若クハ師弟及ヒ離隙アル者ハ
並ニ回避スル事ヲ聽ス違フ者ハ罪ニ
増減ナシト虽モ笞三十若シ増減ア
ル者ハ故出入人罪ヲ以テ論スト夫以

聖勅綱領ハ國家ノ大法ナリ國民謹テ
遵守スル所ノモノ也然ルヲ況ヤ官吏ヲ
ヤ増シテ況ヤ警視官ヲヤ主トシテ此
聖勅綱領ヲ遵守シ從テ其條目ヲ記
憶シ日ニ月ニ之ヲ實行スル者ナリ豈警
視官ニシテ一日斤時モ之ヲ遺忘スルノ
理アラム哉然ルニ本年五月赤野禮行
教輩ノ警視官奸謀ヲ以テ己ヲ罪セム
トスルヲ偵知シ其罪ニ堪ケ中警視石
井邦猷ニ向ツテ書ヲ呈シ公平至當

吟味ヲ仰キタルニ豈計ニ邦猷其書ヲ
以テ間接被告ノ永澤警視補ニ
下付シ之ヲ主任トシテ以テ劫テ柔野ヲ
吟味シ理不盡ニ拘留セシム又々其書
ヲ同ニ間接被告ノ秋警視補ニ下付シ
曾テ警視局ヨリ竊ニ金五圓ヲ共ニ柔
野ヲ罪ニ誣告スヘシト教唆シタル礼行
直接ノ被告タル木村真三郎ト萩カ
自宅ニ密議シ務メ被告答辯書ヲ
作為セシハ夫レ主任トシテ

聖勅綱領ヲ遵守シ詳カニ其條目ヲ記
憶シ日ニ月ニ之ヲ實行セシメ遺忘セム
ト欲ス臣之ヲ遺忘ニ能ハサルノ中警視
石井邦猷ニシテ原告柔野禮行ノ本訴
ヲ法律ノ取調離隙アリ回避スヘキノ間
接被告者ニ下付シ剽ハ其被告者ヲ
主任トシテ却テ原告ヲ吟味シ理不盡ニ
之レヲ拘留セシメノタリ又々主任トシテ
聖勅綱領ヲ遵守シ詳カニ其條目
ヲ記憶シ日ニ月ニ之ヲ實行シ遺忘

セハト欲ス正之ヲ遺忘ニ能ハサルノ警視
第三課糾問掛ハ永澤警視補ニシテ
自身ハ法律ノ所謂離隙アリ回避
スヘキノ間接被告ノ位地ニ在ルヲ熟知スル
者ニシテ却テ其原告ヲ吟味スヘキトノ石
井邦猷ノ命ヲ日受ス又々同位地同官
ノ萩警視補ニシテ自身ガ間接原告
素野ガ訥状ヲ自宅ニ於テ嘗テ金圓ヲ
典ヘ素野ヲ罪ニ誣告スヘシト教唆シタル
礼行直接ノ被告木村真三郎ト密カニ

協議ニ豫メ其答辯書ヲ作為シタリ
此則中警視石井邦猷ガ有心故造
以テ

聖勅ヲ背キ國家ノ大法ヲ亂傷ニタル
罪跡明白ナル者也矣

同律干名犯義ノ條ニ曰ク二等親ノ
尊長ヲ告ル者ハ實ヲ得ルト虽モ杖
九十其被告者ハ自首ニ同シテ罪ヲ
免スト夫レ實ヲ口ハ者ト虽モ尚如此
況ヤ誣告ヲ以テ本條ハ人道ノ

大倫ヲ保全シ風俗ヲ厚正ナラシムル
ノ大本也然ルニ本年丑月中警視
石井邦猷カ素野禮行冤獄ヲ起ス
ヤ勝田典從ヲ從改地拘致シ禮行ノ
罪ヲ已ニ証証セシメタリ其典從ハ禮行ノ
姪也警視ハ乃テ典從ヲシテ二等親ノ
尊長タル素野ヲ証告セシメタリ夫レ
至トシテ

聖勅綱領ヲ遵守シ詳カニ其條目ヲ
記憶シ日月之ヲ實行シ遺忘セム

ト欲ス正之ヲ遺忘シ能ハサルノ警視官ニ
シテ敢テ法律ノ所謂二等親ヲ証告セ
シメタル者此則中警視石井邦猷ガ有
心故造以テ

聖勅ニ背キ國家ノ大法ヲ亂傷シ人道
ノ大倫ヲ毀損シタルノ罪跡明白ナル者
也矣

如此石井邦猷ノ罪跡明白ナリ而シテ
素野ガ冤獄ニ因テ漸リ糾問判事ノ
公判ニ因テ其禍毒ヲ免レタルヲ聞見

スルノ人民善リ悚然セサルハナシ然ルモ
邦猷毫モ愧ル色ナク殊ニ岡孝慈ヨリ
邦猷ガ不正ノ条ヲ舉ケテ之ヲ面責シ
タルモ蛙面懸水ト一般恬然トシテ悔悟
セサルノミナラス却テ黠智ヲ廻シ其罪ヲ
掩ントスル字近日聞リ所ニ因レハ禮行
有心改造ノ新状ヲ出シタルヲ聞キ
去ル廿四日江口等ノ二三官ト閉局
後ニ議事ヲ開キタリト其議ノ外洩
スル所ヲ聞クニ其事實ニ於ラハ免カレ

難シト虫モ木村一金田ヲ共ヘタルハ
別探偵ヲ托シタリト爲シ成ル可クハ
有心改造ノ名ノミ免レムト專ラ江口ニ
依リ其方略ヲ定メ昨今渡辺旋事
ニ屢往覆シテ之ヲ謀ルト此説果シテ
真ナル乎警視局ハ外面空威虚
權ヲ示シ内部ハ罪犯ノ隠匿窟ト一
般何ソ卑劣ノ甚シキ哉聞者唾罵
セサルハアラサル可シ嗚呼警視ノ威權
地ニ墜タリト云フニ至ラハ如何ニテ其職

務ヲ行フ可キヤ又タ曰リ邦猷ハ監獄
百長タルノ故ヲ以テ同百之用地ト名
稱シ嘗テ開拓使ヨリ北海道ノ地數
萬坪ヲ受取り竊カニ其内ヲ區畫
シ官負敷葺ト策ヲ定メ迫々廢使
立縣ニ際シ之ヲ私有ト爲シト豫約
アリ又タ警視權ヲ以テ屠牛場ヲ占有
スルノ事美ニ小菅煉化石製場ノ事
等皆竊カニ責顯ニ連及スルモノニテ
邦猷ハ其周旋人タルヲ以テ仮令ヒ

罪跡明白スト虽モ其之ヲ救護スル者
某々氏等若干名アリ今其尤著明ナル
一ヲ舉ケルニ客年紀彈ニ係リ官ヲ罷
ナタル岩重某ヲ邦猷私心ヲ以テ妄リニ
再任シタルニヨリ政府責問ヲ下シテ
其專横ヲ正ス答辯ニ四前後狼狽シ
皆暖昧ニシテ其要ヲ得ス遂ニ明辯スル
能ハサルヲ以テ邦猷馳テ某責顯ニ至リ
哀ヲ乞ヒ忽テ其事止ムヲ得タリ其
引カ如クナルヲ以テ目下露頭ノ事モ

十一月ヲ期ニ到庭國會ニ付スルニ非レハ
其事ノ明瞭ナルハ望ム可カラスト此等
ハ道路ニ説ク所ト虽モ袒ニ於テハ
信スルニ足レリトス如何トナレハ夫レ官
吏ハ過誤失錯ト虽モ其事明瞭ナレハ
直チニ懲罰ニ處セラレ然ルニ今邦猷ノ
罪其證據ハ悉ク收掌セサルモ有心
故造ノ罪跡ハ

聖勅ニ背キ國家ノ大法ヲ亂傷シ人
道ノ大偏ヲ毀損シタルノニケテ余ヲ

以テ明白セリ又夕旦糾問判事ノ公
判ニ因テ禮行無罪ニ歸シ而シテ邦
猷ヲ有心故造ノ被告トシ官名ヲ付
シテ公庭ニ出訴シタル以上ハ其跡亦
タ掩フ可カラスニテ尚依然ト官職ニ在リ
人民道路ニ嘖々トシテ怪シムモ政府
黙ニテ知ラサルガ如リナルヲ以テ觀シハ
前説益謬傳ニ非ルヲ信セリ諛説
果テ真ナル乎國務ハ悉ク私利ヲ營
ムノ名稱ナリ苟モ志有ル者ニテ如此

ナルヲ聞カシナハ豈慷慨悲憤ニ勝可シ
武嗚呼政府ノ威信殆シト地ニ墜タリ
ト言フニ至ル可シ祐恒以為リ一時ノ偷安
ハ百代ノ禍害先年草莽草明治
歴史編輯ノ為ニ尾去澤銅山一件
ヲ記録シタル一篇アリ文中ニ政府故
ラニ井上馨ノ罪ヲ宥宥セムト欲シ
權大判事河野敬録ノ剛直ヲ忌嫌
シ元老院議官ニ轉任セシメ池田弥
一西馮某等ヲ以テ談事件ヲ處決セシメ

タル事等ヲ明記セリ祐恒之ヲ教見シテ
胸中信偽出沒ス然ルニ客歲藤田
組一件書類ヲ換閱シタルニ一通ノ書
状アリ其文中尾去澤銅山一件モ責
頭某々氏ノ配慮ニ因テ司法官吏入
換アリ不日其結果ヲ見シトアリ一見
驚愕始テ前書ノ真誠ナルヲ知レリ今
馮シテ以テ左右ニ奉ス虽然此ハ是既
往ノ事敢テ論スルモ益ナシト虽モ現今天
下ニ掩フ可カラサル石井邦猷ノ罪ヲシテ

萬一、一時、偷安ノ為メニ此ノ前轍ヲ蹈ム
ガ如キ處置アラハ忽チ禍害目下ニ
激生スルヲ如何セシ百代

聖徳ノ瑕瑾ヲ如何セシ 閣下宜シク速ニ
爰問ヲ遂ケ以テ石井邦猷ノ罪ヲ正シ
玉へ必スシモ慷慨悲憤ノ志士ヲシテ明治
聖代ノ刑場ニ登ラシムル者アル勿レ様
表以聞

鹿見島縣士族

明治十三年九月廿六日

吉國祐恒

大隈重信殿

聽

祐恒謹而

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

聞強ス量キニ不丹中意也、
聖明ヲ擁蔽シ國法ヲ亂傷シ有心故逆
ハテ不正、獄ヲ起シ人民ヲ殘害セラレタルハ
天下ニ奈何シテ決テ掩フ可カラサルニ至レ
リ此則上下ヲ否塞シ友民ヲ離隔シ上
神武以來二千有餘年一統連綿海内
無此美古不易ノ
皇基ヲ危シ國氏荼毒ヲ被フル其ヲ
ルヲ以テ頑鈍不方、祐恒慷慨悲憤、得

ハス一身ヲ奉テ上
先皇ノ教ニ下國民ノ為ニ鼎鑪ニ就
テ以テ起スル所アラシトス其ヲ以テ西
國下ニ向テ祐恒禮ヲ所質問ス其不正歎
ヲ起シ上下否塞友民疑隔シ殆ント國ノ
大禍ヲ醸出セシトスルモ顧ミスレテ尚且罪ヲ
遂ケ不良ヲ母具クハ石井氏一己ノ存意歎
將テ其親友一同則モ其親全局ノ起意
ナル歎社恒暴キモ惑フ所アリ大臣各議
内務ノ諸公ニ建言シテ明流ヲ仰キ既ニ

政府ノ其意ニ出デサルハ了解セリトモ
清令モ其親ノ為論歎否サルハ西國下ノ
兵權者ヲ直視セシメラレシマラ然ラサレ
遂亦貫忍ハ其親全局ノ其義ト信スルナ
如何トナレハ其親親ノ巡査トモ僅ニ一己
ノ民ヲ以テ被告サレ、スラ其親其親ヲ
アラ停止スルノ規則アルモ其長友ニシテ然
カモ有心故送ノ刑事、被告サレ人民洵ニ
危懼ノ念ヲ起シテヨリニケ月、涉ルモ其
与負ニシテ屬拷子ヲ、密議ニ其罪ヲ

遂ニトスル者ナルハ之ヲ聞クモ一人之ヲ亦トシ
テ論スルノ人アルヲ聞カス嗚呼幸哉友吏
ハ悉ク阿波曲朽安友負祿輩ノ布已
欣決テ吾ラス勇邁烈士ノ巢窟也魚然
國民ノ非トスルヲ知テ論スルノ人ナキハ則
社恒馬論ト信セサルヲ得セルナリ然而テ
身處事ノ際、當ツテ自信ヲ以テ基礎ト
スルハ過失ノ基源タルニ因リ函閣下列席
於テ女者吾ノ兵解ラ下タシ玉、日一
已、私事、非又國ノ公事也頓首

以聞

庶幾始能士旋

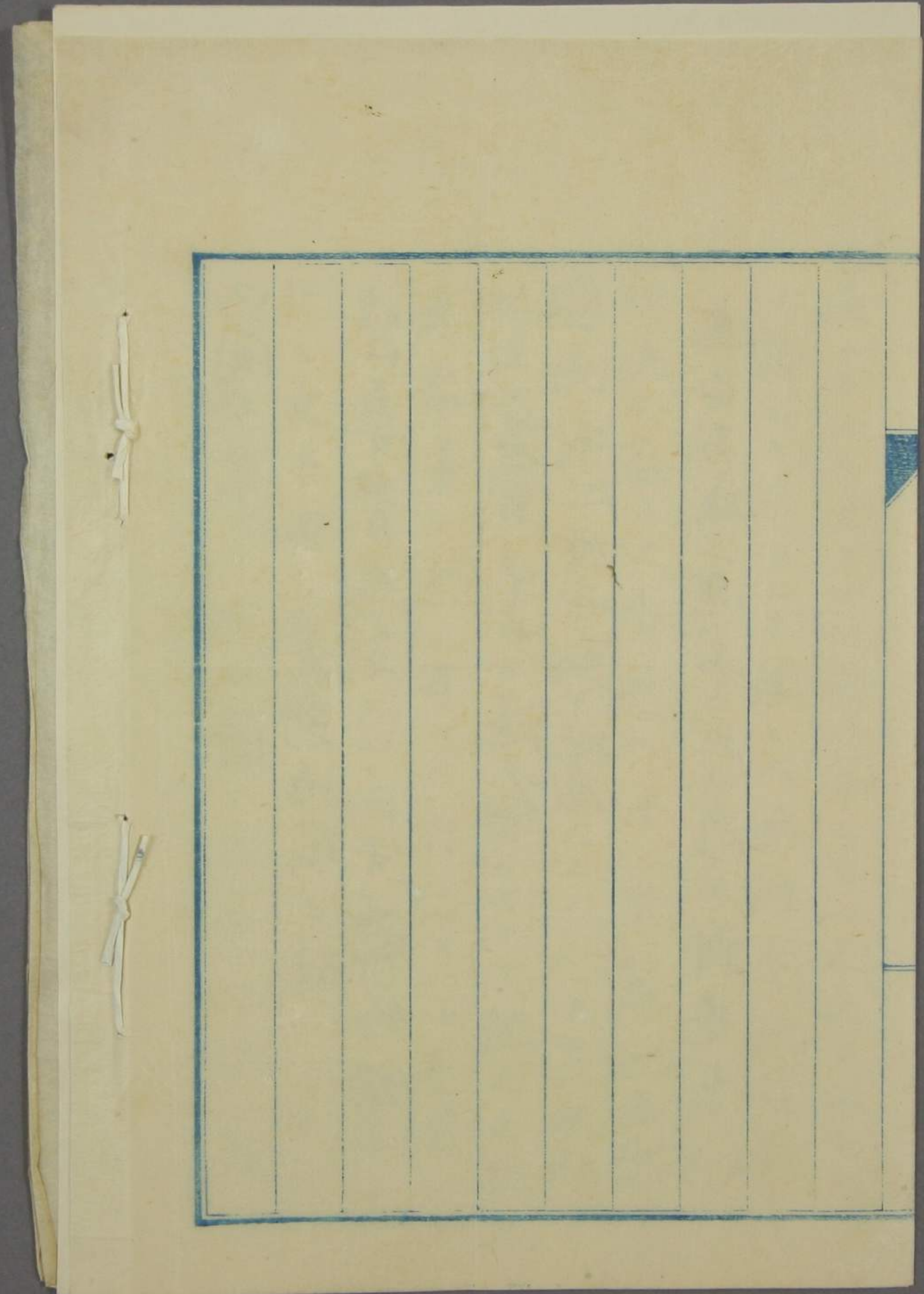
明治十三年十月十一日

吉國社恒

石井中幸 宛友

田中權中幸 宛友

追白可成二通各一為ノ副号又



上陳書

卷五

七

大正十一年四月
隈侯爵邸書

草莽一外、祐桓滅公

如首病夕上、海人宿、惟ルニ聲、視弓也
官中、聖徳石井邦然カ方心故、遠以、不
白、微リ起シタルハ上下否塞、官及、融、陽、ノ
基ヲ開テ而テ益非ヲ逐ケ、聖ヲ費カントスル
實ニ國家禍害、漏、結タルヲ以テ、連ニ其ノ
罪ヲ正サシム事ヲ曩キニ上陳セタリ、余来
僅カ三四旬、今、開ク所ニ因レハ、邦然カ、益一外
母、惡益相、勇リ、奸心、惡智ヲ逞フニ、國家有
切、正義、忠道ノ士、陸軍中尉、兼一、等、終、視

補忠也等字部純隨邦然カ私意ハ所課
曲長セサルヲ以テ之ヲ内勢極ニ遠シ其兼官ヲ
奪ハミナタリト移極當春以來純隨ニ面セス
嘗テ迫汝ヲ知ラサルヲ以テ始メ其事ヲ聞ク
ヤ如何ナル罷科ヲ犯シテ以テ懲罰ノ極度ニ
至ルセラシタル歟私心甚ク安ヤラス三々ヒ宅ノ向
テ皆不在一封ノ書アリ其大意ヲ記シヌタ
純隨親迫スル者ノ言ヲ聞テ凡ソ其詳ナル
ヲ得たり豈驚歎セサル可シヤ極極伏テ
控スルニ及レ身家ヲ忘テ官後ニ盡ス者ハ

忠ニナリ私計ノ為メニ友戚ヲ伍ル者ハ奸
邪ナリ純隨ノ妻言セト歎ミタルハ身家
ヲ忘レテ官後ニ至スノ精神少シク其
淺シタル者ナリ邦然ガ妄リニ純隨極務ノ
過失ナキモ建言己シカニ邦曲ニ因カルヲ以テ
内勢極ヲミテ其ノ懲罰ヲ下サシメタルハ私
計ノ為メニ友戚ヲ伍リシ者ニミテ其古今テ
忠正奸邪ノ正体ナリ焉今其款末ヲ詳
カニスルニ邦然復等ヲミテ亦正獄ヲ
起サシメタルハ國家ノ重事タルヲ以テ純

地保り夏より所アリ本月一日署を會
ニ其事ヲ議シ又夕上馬負ニ論シタルモ
或ハ姑息臨御遂ニ斷交ノ意ナキヲ察
シ慷慨ノ余リ柝方内帑々ニ至リ公然
左廷務公ニ建言セシ事ヲ内儀ス卿ハ
行政長官ナルヲ以テ穩和ヲ主トシ
嚮時政者ノ或可ヲ待ツヘシト地保其意ニ
嗟ト過キタリトサ、又ヲ以テ職勢上ノ過失
トシ懲戒令ニ照スノ道理番々アラサルナリ
職ヲ重スルノ厚キ以テ稱スヘキ事ナリ然ル

ニ本月十四日甲子遣權中野親據地保美百
テ、視ヲ立多トシテ地保ニ達スルニハ内
ノ事ヲ建言スルニ同意ニ認ラサルハ不視
切ナリ方面掛等、於テ兼賚セス云々其語
彙辭表ヲ出タスヘシト言フガ如シ地保表
ク不賚曰ク建言ノ事ヲ付テ地保ニ送アリ
トセハ法ニ照シテ以テ論シテテナリ何辭
表ヲ出サシ頃ヤ之ヲ出タスノ理ナキニ於テ
ヲヤ故ニ天下ニ對シテ笑ハレサルノ憂分ア
リタシトテ過キタリト地保同友ノ人等之

ヲ守キ著ニ高リニ守部ヲ免監スルガ如キ
失錯アラハ目下紛議ノ起ルヲ以テ審力ニ
上与負ニ忠告ニタルモ最子上与歩議
ニタリトテ其議行レス以之觀之純地ノ
懲罰ハ田宅之弊視詔ヲ所ノ建言同察
ニ認ラサル不親切ト云フノ一点ヲ以テ懲罰
爲ニテ次議ニ内勢卿ニ具申ニタルベケ
レハ与長石并邦就ニ議ニ預ラサルノ理
ナシ又内勢卿モ唯不親切ノ一点ヲ以テ公
器トシ懲戒令ニ及セラル、通アラサルカ如シ

其甚タ怪ムヘキノ事ナリ況ヤ純地ノ建言
ハ卿ノ意ニ服ニテ在廷諸公ニ呈セサリニ
ヲヤ然ルニ同十六日免官ノ辭令書ヲ報
答者ノ便ニ托シ純地ノ私宅ニ投シ受
取ラサスヘシト与名ヲ以テ一葉ノ副達ア
リ純地甚タ不服直ニ出向邦就ニ面會
シ其理由ヲ守リニ知ラスト答ヘ再ヒ詰問ニ
タルニ點防ハ内勢卿ノ權内ニアルヲ以テ預
リ知ラスト畏縮ニシテ答ヘタル由也以テ邦
就ノ奸邪ナル如ク夫レ甚タニ夫レ純地

其事ヲ更言セシトスルヲ同寮ニ聽ラセ
不親切ト云フノ由込、祝ニシテ与内ノ
事ヲ内智卿ニ具申スルニ与也邦ノ
ニ定法セサル可シヤ必ス邦ノ
其事私曲ニ出ワルヲ以テ純地ニ面
レシ事ヲ望シ言フ能ハカル者ナルヘシ矣
如女奸策ヲ廻ラス其事實邦ノ私計
ニ出テ而シ惣濟ヲ上友ニ俾セシムル事
今日ニ始ルニ必ス今其改往ノ一ヲ舉ケルニ
故大ニ親内ヲ正フニテ外ニ及サントノ至

義ヲ確立シタル以來石井邦就私カニ
入長ニ全ク借リ仕友ノ周旋ヲおシタル
事ニ他教条不正ノ處ヲ舉テ人臣曰
リ告ル者アリ大ニ親内ノ第ニ深ク固ク善ニ内調ヲ命ズ邦就ノ之ヲ
言ニ快ニ己シ志ヲ得ルヤ大山大ニ祝ノ
命ヲ以テ叔本邦就祝禱ヲシテ孝慈辭
表ヲ出タスヘシト傳達セシム叔本邦就
申ケ問フ邦就曰リ更ニ理由ナシ上ノ
決法ナリト叔本之ヲ固ニ傳ヘ石服アラハ
甚者ヲ報セト者ニ送封書辭表ニ及フ

△第ニ深ク固ク善ニ内調ヲ命ズ邦就

阿ニ各深ニ事ヲ知ル者ハ大ニ親ハ蒙
召ニテ岡ノ何人タルヤ知ラズ是ハ石
井ノ私心ニ出タルナリト一時嘖々傳唱セ
リ然ルニ其ノ友ヲ免スルヤ同日母ニ深
擧便内則ヲ改正トテ曰リ友吏ハ決テ
不云ナキ者ト見做ニ探偵任事ニ及リス
ト及則到直不屈ノ一孝慈ヲ保キ衆
口ヲ塞キシ者ナルヘシ尔来馬風一妾ニ
私交ヲ重シシ公敵ヲ輕ニスルニ至レリト
今純徳ノ徳爵モ同轍ニ出タリ或ハ大ニ

祝ノ命ト云ヒ或ハ内帑御ノ断ト答ヘ
其理由ヲ辨セサルヲ乃サル人則本ノ
如キニ對シテハ上馬ノ交儀ト云フニ止リ
全リ理由ヲ發明スルナケレハ則邪説ガ私
計ノおナニ友戚ヲ弄スルノ奸策タル知
ルヘキヤ斯ニ字句純徳ガ身家ヲ忘テ
友戚ニ辱シタルハ今日僅カ建言ノ事ニ
始ルニ能ハナリ歟祝劔業以事尤其著
明ナル者ヲ舉ソルニ幸未ノ年府下選卒
ノ設置アリ其業未タ意ヲ舉ラズ廟堂

征韓可否ノ議起リ從テ考保寧殆コト
尾鮮ノ色ヲ取ハス時海女ニ在リ者ハ士
林ニ遠セサルカ如シ或ハ面罵シテ文証ヲ
絶テ在り危身ノ患アルヲ以テ雷同友
ヲ去ル者目ニ發々アリ時ニ絶地喪禮
群罵リ歎ニス歟然公私ノ區域ヲ弁
論ニ回審重信喜藏等ト謀リ其部
下ヲ勸擄セシメテ本寨ヲ輔佐シタ
リ其絶地者切著明ナル者一也爾來亦
部ノ強ニ在リ強賊數輩民家ヲ犯ス絶

地巡査ヲ集ルノ旨マナキヲ以テ單身
當ツテ之ヲ捕セント數賊ト白刃ノ中ニ闘
ヒ遂ニ其民家ヲヒテ福害ヲ蒙ラシメ
ス其ノニ重傷ヲ負ヒ身ニ瘡ニ疾トナシリ
歟ヲ以テ三千ノ巡査益高所ニ其職忘
身ノ精神ヲ啓蒙セシメリ其絶地者
切著明ノ者二也歟ノニヶ条ハ祐恒東
島ニ在テ南見スル所ナリ十年西南ノ役
不働ニ強圓肥仔水候殿ニ在リ先鋒
者ニ大浮山野郎ノ苦戦傷長ニ同員傷

此一敗を臨七里余り退縮し殆ど本國
危多し迫マシ平野一帯り代テ隊長トナ
り敵墨矢苦ヲ夜襲し兵線僅二里ヲ
伸廣シタルニ本夜敵軍我本郭ヲ
襲撃し平野戦死僅テ軍氣未復タ衰テ
時ニ純地澤井辺知ド使命ヲ以テ来テ本
國ニ在リ川路ヲ將平野戦死ノ報ヲ均テ
純地ヲ以テ誤信ノ者タラシム純地疾疾
衣服着脱寢食物ヲ余セサルノ身ヲ以テ
日夜奮勵隊士ト艱苦ヲ共ツニシ山野ニ轉

戦シ大河ヲ渡リ疾ヲ越ル皆從僕ノ肩
ニ倚リ遂ニアテコトノ疾ヲ臨シ出水郷
ノ敵窟ヲ撃破シ比企副友并川路騎
西久木村等ノ中隊長ト被シ辱何久根
街道ニ候兵ヲ出タシ純地自ラ之ヲ指
揮シ戦ヲ挑シ敵兵ノ強弱ヲ識シ地理
人情ヲ熟察シ策ヲ定メ機ヲ計リ大
進撃ヲナシ一日ノ留西方一條二峰ノ要
害ヲ臨シ行程九里余進撃ニシテ千
代河ニ達ス決一戦敵ノ膽ヲ奪ヒ味方ノ

軍氣益銳遠ス其機ヲ失セズ敵ノ意
接来著シ未夕部署定マラサルヲ察知シ
河ノ下流ヲ流リ而岸ノ敵壘ヲ一戦ノ下
ニ撃破シ尋テ其援兵ヲ追散シ面目
本道ノ聯絡ヲ取リニハ純德有切著
明ノ勇三ナリ本國ニ慶見為ヨク着シ將ニ
日側ニ向ハントスルニ當リ下役十六ヶ郷
悉ク敵地ニシテ官署ト海路聯絡ヲ通
シ寇後ノ患アルヲ以テ之ヲ鈔撫ス可キノ
命下ル純德僅カニ中隊ノ孤軍ヲ以テ其命

ヲ奪ヒ各郷ヲ巡回シ各一々巨礮ヲ負
載シ厚ク朝夕ヲ流シ悉ク帰取ニ再ヒ朝
命ニ遠背セサルノ盟約ヲナサシメタリ而
シテ其負傷之疾自癒ニ能ハサル者ハ
皆病況ニ付シ又々農高又老ヲ召ビ起
々躬与ヲ流シシ望ニ傷一區ニナル者ヲ悉
ク家ニ帰ラシメ各安堵セシム又夕已ニ敵
捕殺スル所トナリシ暮毛休二郎ヲ救ヒ出
タシ巡回日數僅十廿日間十六ヶ郷人負殆
ント三千垂リ帰取ニ盟約ヲ奉セリ尋テ

都之城ヲ破リ宮崇ニ戦ヒ東京ニ凱旋
ス然ルニ城山再乱ノ時十ヶ郷ノ患セサ
リトハ其盟約アリニ故也ト今ニ薩人ノ口
冒スル所也其純地者切カ著明ナル事四
也其ニケ案ハ移臣不肖ヲ以テ曹長ヲ好
シ下副官心泊トニテ族隊ニ付従シ高子現
ニ目撃スル所ナリ然リテ抑純地ノ氣
質ハ正直不屈ニシテ苟モ被論西事
ニ涉ルアルハ平。稱美親也スル人ト云モ
公言廷諍ニシテ私親ヲ辱ルニ至ル歟ノ

正直不屈ノ氣養ヒテ如出カ切ヲ感セ
ニ者ナルヘシ今邦賊ニ抗スルカ不正ヲ
學ケテ左是訪公ニ建議セシト内務卿
ニ内議ニタルモ其正直不屈ノ氣切
リ淺淺ニタルモノニシテ決シテ私心ニ出テ
ナルハ則十ヶ年身死ヲ忘レテ友敵ニ共
シタル治乱一君一日ノ如キ以テ純地ノ正士
タルハ知ルニ足レリ移臣存考下スルニ
一時微恙ニ面シ一我以テ負傷瘵疾トナ
リニ者スラ政府特恩ヲ以テ終身扶筋

ヲ始キス況ヤ皮履ニ其ニ瘵疾トナリ
其ノ為ニ其ニテ切ラサル者世人ニ其
ス可キヲ知ラるトテ其懲罰之可キヲ
知ラサルナリ其レ之ヲ知テ奸邪ノ心
ヲ以テ

聖明ヲ擁護ス人其ヲ殘害ト上下否塞
つ及ニ其邪陽ノ基ヲ開キタルニ比スレハ其
切要膏壤膏ナラサルナリ又テ守ク所ニ
依レハ其負ガ本村ニテ即ニ人主ヲ其ハ
不其ノ自首ヲナサシメタルハ不正ノ事ト

ニ安達江口ノ其初ヲ始トシテ石井
中其視ニ至当ノ其分アルベシト屢陳言
スルモ遷延今日ニ至ルニ純地ノ免黜ハ
回官等諒ノ之ヲ守キ後議ヲ生セシテ
シ憂ヒ上ニ其負ニ忠告シタルモ決議ト云
ラハテ其連ニ内務卿ヲシテ之ヲ行ハシ
メタリ又他ナシテ其負ノ不正ハ法律ニ
獨ルモ其罪ガ私心ヲ助ケテ其罪
隨之建言セントシタルハ忠直ナルモ其罪
ガ私心ヲ好クルカ為メ如只天下ノ貴冑

ヲ乱タシタル者ナルベシ又シ純随ノ切ハ結
々トシテ日月ト昔ニ懸心リ邦家ノ累ハ白
々タル事符ノ照スラ視ルアリ共祐恒一
己ノ私是故指ニテラス天下萬目信指ノ
免カハル所ナリ焉吾亦カ切志直正義
ノ純随シニテ却テ尤器奸邪詭偽ナル
邦家ガ徳ニ罹テ免罪ヲ被ケリ物我内
習卿ヲシテ共ノ懲罰ヲ行ハシメたり恐リ
ハ後世

聖代ノ政府ヲシテ賞罰當ラズ失スルノ謗ヲ

奉タスニ至ラシク又々且目下紛擾ナキヲ
保チ難カラシメ共共祐恒曩キニ邦家ヲ
シテ一日女ニ共要職ニ在ラシメ一日

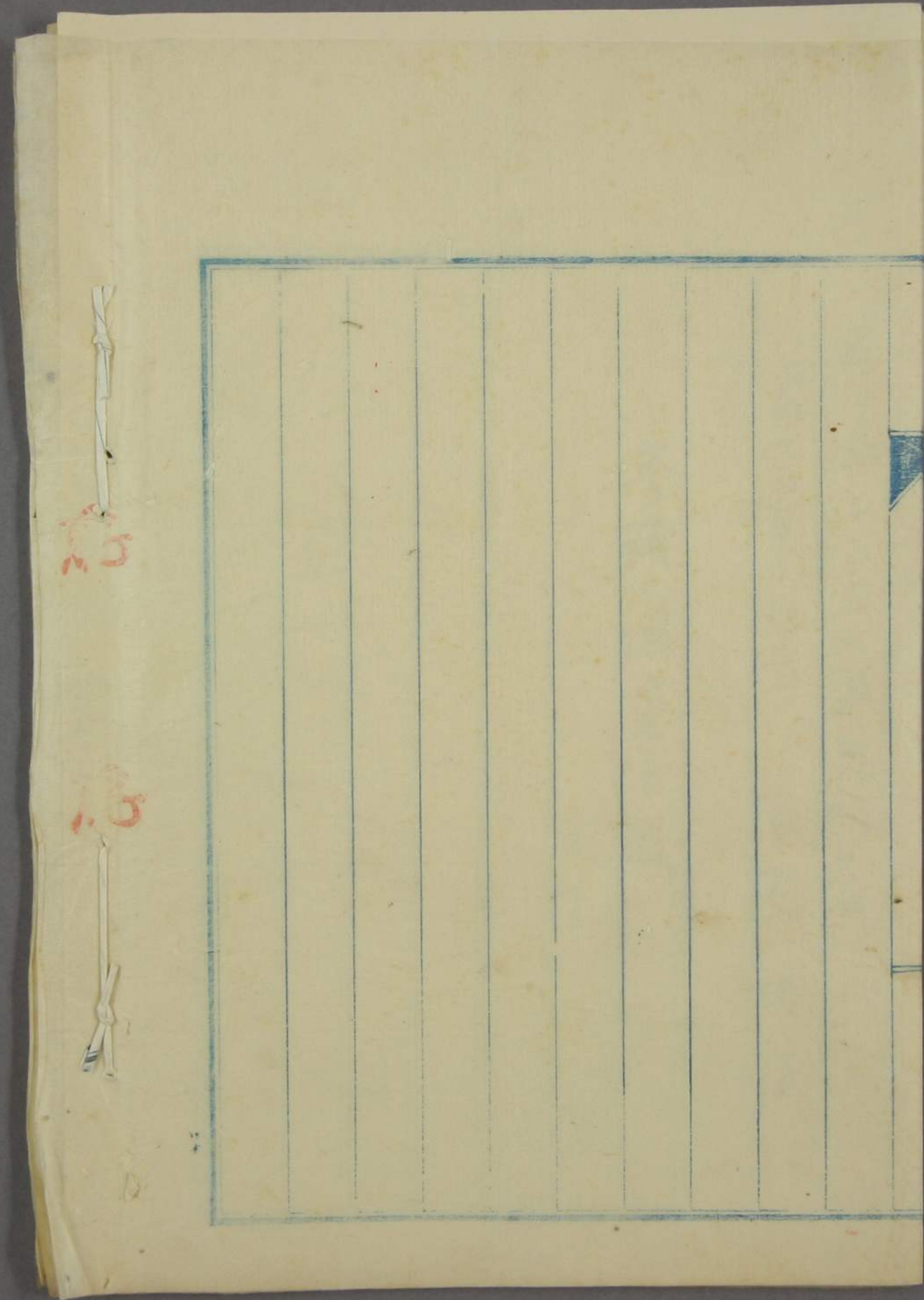
聖旨ニ侍リ國君ヲ奉毒スト上陳シタル
所以ナリ物々ニ人テ後々益遠死ムと學シ
幕ルヲ守キ點ニニ存スルニ忍ヒス辱威ヲ
冒シ上傳スル所ナリ 閣下祐恒カ言ヲ
參驗シ以テ言其事ニ當ラサレハ嚴刑ニ受
セラル、モ鼎鑊固ヨリ甘ニスル所言其事
ニ當ラハ連ニ英武ヲ下タシ共器ヲ正シ人

長久安のこ玉へ誠昌の旨

御座十三年十月廿日 吉國 恒齋

矢多福大隈重信殿

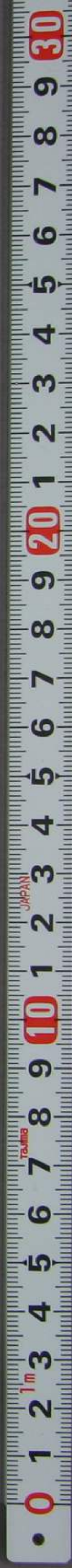
閣下



上陳副書

頁

頁



大正十一年四月
隈侯爵邸寄贈

祐恒謹而副書

以テ止言ス畏クニ言シタル主義、如ク警官
有心故違フ以テ不正ノ獄ヲ起シ人長ク罪
構陷セムトシタル所為者固ヨリ政府御趣
意ニ非ス全ク中野ニ發意シタル者ナシ其
發意者曰下リ速ニ尋官シ玉ハサレ此一事
政治ニニ害ヲ及タスニ顯然セリ如何トナシ
桑野様ハ本村ニ石山ニ自首リ為サレ
タル事ヲ跡判然タル石井中警視ヲ被シテ
民刑兩件一時、發起シ一方ニ向テ被告者

刑ヲ求ノ又一方、向テ損害要償ノ訶^トカ
現^テ下^ニ案ノ取調中也其後スルニ當^リヤ
官^リ被告トレ刑ヲ求レ^ル則^チ不^レ正^ニ之^レ獄ハ政府
之^レ沛^ニ趣^キ出^ルト考^ムル^ニ治^安何^レ以^テ
係^ル可^レシヤ又々損害要償モ政府、漸^ニサ^ルリ
ゆ^ス人心何^レ以^テ安^スコ^ス可^レシヤ今其人^ヲ以^テ
被告トスレハ其人、止^マル^ニ此^レ至^ラハ其名義^ニ
出^ル、利害得失帛^テ如何^シヤ且^チ容^疑藤
田^組無^罪放^免ニ^歸シ^タん時、其^レ原因、
過^失出^ル、公^罪ナルモ其^レ主任^官等、間

髪^ヲ容^レス特^ニ政黨^閉街[、]後^非常^急劇[、]
懲^罰ニ^處セラ^レタリ然^ルニ[、]常^節ノ放^免ニ[、]
帰^シタルハ其^レ原因^有心^故造^ニ出^ルルモノニ^テ
今日[、]至^ルモ尚^モ依然^トレ^テ官^ニ在^ルヲ^以テ[、]觀^ル
時^ニ政府^沛趣^意何^レニ^キん哉^リ甚^クタ
苦^シ所^也此^レ閣^下、明^論ヲ^作ル^所以^也誠^恐
頓^首
吉^國祐^恒

明治二十二年九月十五日

大隈参議殿

閣下

